

ヴォイス ～森の声～

3号 vol.2-2 2008/07/16

中・高校生☆協同編集による

クリティカル・カルチャー・マガジン



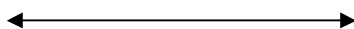
1部：特集★1「行事を考える ②」 3p

★ 2「生徒の自発；ライブ＊有志演劇＊キャラバン」 16p

★ 3「Documents 高1」 21p

Guests

味沢恕子・及川瑞貴・岡野こずえ・鬼沢真之・佐藤 智・高橋文子・中野 裕



2部：「Colum by editors」

ぼくの好きな「解き方」 29p ☆ えっ! まじかよ。 31p

飯田橋ギンレイ 33p ☆ 「趣味、ゴミ拾い」 34p ☆ ケムクサ 35p



体育祭もとい自森ンピック。中一、高一は初めての行事でした。

それにもかかわらず、すごく自森ンピックの実行委員会などでよく見た気がします。すごいなあ。

次の行事は学園祭もとい表現祭ですね。今からどうなるかが楽しみです。

板垣 奏男（高2）



暑中

もうすぐ夏休みです



特集 1＊行事日程

「行事日程の話し合い」のこと、一保護者の感想

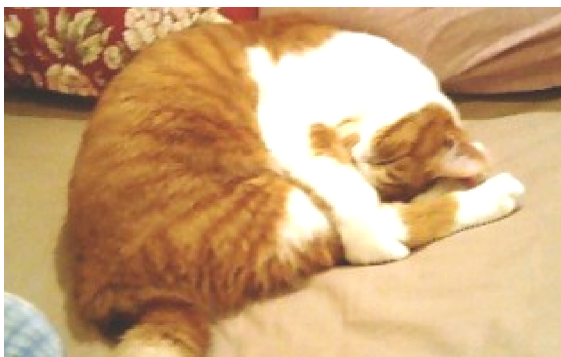
保護者も関心が高いのである

保護者を代表することはできないけど、一保護者の感想をすこし。

ボクは、かねてボクのブログ（Enjoy! Jimori-Life）にも書いているとおり、年間行事日程の件では、生徒と教員の話し合いで決めていくのがいいと思っている。保護者はあんまり口出しをするべきではないとも。

しかし、この件について、保護者・親の関心は高いのである。6月7日に全校保護者連絡会（ジモリはPTAという組織がなく、緩やかな語りの場みたいなもの、年に数回）というのが行われたんだけど、中心の議題がやはり「年間行事日程の件」だった。60人以上の方が参加していた。もちろん中高の校長も。生徒が2名オブザーバー参加してくれていた。発言者が多く、時間が足りないくらいだった。

当日の連絡会の中身は、勝手にかいつまんでみると、行事特に学園祭をなくさないでというところから、評価表や授業、生徒と教員の関係性のことにまで及んだ。学園祭をなくさないでと言うのは、冒頭のボクの考えからすると「気持ちはわかるけど、ちょっとアツクなりすぎかなー」と思ったりした。でもでも、繰り返すけど、関心は高いのだ。（ブログの6月14日に詳細）



ただ、保護者のほうはこれを機に、学園全体が抱えているさまざまな課題に取り組むという流れになっていくんだと思う。保護者同士や学校側とじかに話し合っていくといろいろなことがわかってく

る。大人も同じだ。そうして、ある程度の方向性をもっていろいろな取り組みが生まれる。保護者もこの数年、財政や生徒募集など努力の輪が広がっていることは事実だ。えへん。

生徒のほうはどうなんだろう？

ボクはジモリに関してはひいきの引き倒しオヤジだから、こんなに生徒が輝いている学校は全国探しても他にないと思っている。授業でも行事でも、生徒が漫然と過ごすことなく、自分や仲間をより高みにもっていこうとする営みがあり、その実現を個々人や集団の中のチカラを通じてサポートしていこうとする教員、関係者も関わっての実践は、すばらしいの一言だ。

けどね、もっと多くの生徒が主体的に参加したほうがいいのと思うことはある。すべてのことに主体的になるのは、まあ、不可能なことではあるけど、年間行事のことについてはもっと多くの論議があっていいのではないかと思う。

年間行事日程の件は、おそらく行事だけのことで終わらない。だから、ちょっとかったるい。でも、大きな課題には間違いないから、あんまり積み残しをしないような解決を望む。積み残しが多いと、あとあと気持ちが分散してうまく行かないように思う。話し合いの過程は、きっとこの学園の輝きの内実をさらに深め、結果、みんなのものになると思う。生徒たちがつくっている学校は、外部からみても輝いて見えるはずだ。

だから、ボクは生徒に期待しているわけなのだ。

時間がないとか、いろいろな制約はあるんだろうけど、生徒と教員の丁寧な話し合いで生み出された試行案については、もちろん応援していくつもりだ。

佐藤 智（高 3 保護者）

行事の話し合いから自森をみる

今まで行事日程のことなどについて、生徒と教員でたくさん話をしてきた。そのことをできるだけ丁寧に、そしてグチャグチャに書いてみようと思う。

【経過】

昨年度の終わりに教員から2つのことが職員会議の決定として生徒に下ろされた。

- ① 9月に割り当てられる行事を年間日程から外す
- ② 年間の全体行事を3つから2つに絞る

それには前期末の学習のリズムを作り出すこと、年間の授業時数を確保すること、また生徒に行事を丁寧ににつくってほしい、という理由がある。

それを受けて生徒は話し合いを立ち上げ教員との話し合いを進めたが、体育祭が始まり、話し合いがいったん打ち切られた。

そして体育祭が終わり、時長武史（H3）が全生徒と教員がぶつかり合えるオープンな話し合いの場として新たな会を立ち上げた。そこには学園祭や音楽祭を立ち上げたい生徒や、それに反対意見を持つ生徒など、さまざまな人が集まった。

6/9（月）～6/24（火）の間に計7回の話し合いを行い、平均して約20人の生徒と2～5人の教員が来た。多いときには全部で60人以上集まったときもあった。武史の強い思いの通りこの会は、1つ1つのことを丁寧に時間をかけて、1人1人の声を拾い、みんなが納得するまで大事に話し合っていた。

まず初めに、この会で何をするのかということについて話し合った。

立ち上げ人の武史は、「これから祭を立ち上げたい人たちが混乱しないように、ちゃんとした日程を決めたほうがいい」という理由でこの会を立ち上げたが、「立ち上がってないのに日程があるのはおかしい。学園祭をやり

たい人が立ち上げてから、こういう話し合いをしたほうがいい」や「行事の話より、評価表や学びについてのことを教員やみんなともっと話した方がいい」などの意見が出た。また、全校行事はやりたい時にすぐやれるものではないから、やっぱり年間日程について考えたほうがいいという意見も出て、そうした意見を話し合った結果、それからの方向性として「この会で全校の決定はできないけれど年間日程について具体的な案を出し合い、この会の中で1つの結果を出し、それを全校に提案しよう」ということがまとまった。

具体案は大きく分けて6つ出た。

- ① 今まで通り 9 月（前期評価表記入期間の前）に学園祭をする
- ② 10 月に有志学園祭をして、12 月に有志音楽祭をする
- ③ 10 月に有志学園祭をして、12 月に全校音楽祭をする
- ④ 10 月に全校学園祭をして、12 月に全校音楽祭をする
- （＊②③④の音楽祭は「立ち上げればできる」という可能性を残すという意味）
- ⑤ 12 月に枠を取り、学園祭と音楽祭でそれぞれのやりたい人同士でバトルし、どちらか1つをやる
- ⑥ 12 月に学園祭と音楽祭の合同行事をやる

■ 9 月に全校行事を入れるか入れないか

まず、9 月に全校行事を入れるか入れないかについて話し合った。主な意見としては、「教員の言う通りにする必要はない」「行事が無くなったからといって、評価表がよくなるわけじゃないから、9 月に入れてもいい」や、その反対意見として「教員が言ってきてくれたから今こういう話し合いができてる。何が問題なのかみんなで話し合うことが大切」「9 月は評価表や授業など、学びについて考えられる時間として使いたい」。また、「今からでは準備期間が短すぎるので 9 月には入れないほうがいい」などが出た。結果、9 月は学びと向き合う期間として全校行事は入れないことが決まり、①の案は無くなった。

■行事を有志にするか、全校にするか

次に行事を有志にするか、全校にするかについて話し合った。まず有志意見。「有志ならやりたくない人がいなくて、やりたい人がやるから、いい学園祭ができる」「もしも学校の1／3の人がやりたいことやったらすごいものができる」「授業時間を使わないから、授業にも影響しないし、教員に迷惑もかからない」。続いて全校意見。「有志は結局高校内輪になる」「やりたくない人もいる。そういうドロドロ感がいい」「有志だと新入生とかは入りにくい」などの意見が出た。結果、有志はよくないという意見がまとまり、きちんと日程を取り、全校の行事としてやろうと決まった。②と③の案が無くなった。

■あと行事を1つやるか、2つやるか

次に、あと行事を1つやるか、2つやるかについて話し合った。⑤に対しての意見。「両方の行事をやりたいから、どちらか1つに選ぶことはできない」「2つやると準備期間が短い。どちらか1つなら長くとれる」。それに対して、「長ければいい行事がつかれるわけでもない」。⑥に対しての意見。「合同行事はスケールダウンする」←「それはやりようによって変わる」「合同なら新しい行事にできる」に対しては、「それは学園祭でも音楽祭でもできる」「準備の時どちらにかたよって、両方本気でできない」

もうすでに体育祭を全校行事として1つやったので、教員の決定では全校行事はあと1つということである。その点⑤と⑥は、それに当てはまるのだが、反対意見が多く出て、「1つにすることはできない」という意見が一致し、日程の前に「学園祭と音楽祭を別々に2つやる」ことがまとまった。

■日程

そして最後に日程が話し合われた。学園祭の日程は、1日にするという話もあったが、1日目で失敗したものを2回目でまた考え直せるなどの点から、2日に決定し、この3つが最終的な候補に挙がった。

10/18（土）・19（日）（公開研 1 週間前）、11/1（土）・2（日）（2 日は飯能祭りで参加する生徒もいる）、11/8（土）・9（日）（公開講座・学校説明会）。話し合いの結果、音楽祭のこと、また、行事と行事の間に少し休みをおける点から、10/18（土）・19（日）の 2 日間で学園祭はやろうと決まった。音楽祭は、冬休みは少し減るが、見に来る人が増えることや、準備期間の長さや授業時数を確保できることから、12/20（土）・21（日）でやることに決まった。

まとめると、その会に集まった生徒の中で、全校生徒に提案しようと決まったのは、

- ① 10/18（土）・19（日）に全校の祭を行う。ただし、9 月中の活動は控え目にし、9/22～10/6 の間は活動を休止し、学びに取り組む時間をつくる。この祭は、今までの学園祭とは違う新しい祭にする。
- ② 12/20（土）・21（日）に全校音楽祭を行い、代休は取らずに冬休みに入る。従って、今年度中にあと 2 つの全校行事を行いたい。

ここまでが 6/24（火）に決まり、高 3、中 3 修学旅行のあと、7/9（水）の 3 限に全校集会が開かれ、この提案を全校生徒に伝えた。その後 4 限に各クラスでこの案について話し合いをしてもらい（その会に出ていた人が各クラスに行き質問等を受けた）、放課後、もう一度会を開き、どんな意見があったかを出し合った。いろいろな意見がでたが、「9 月の活動を 控え目にするというのはどの程度か分からない」「学園祭が立ち上がったならもう一度しっかりと話し合う」と「音楽祭の日程は閉寮が遅れるから、寮生に確認をとってほしい」「寮監に伝える」の 2 つのことを除き日程への反対は無かったため、その日の職員会議にその時会に出ていた人全員で行き、上記の会の提案を全校生徒の決定とし、教員の決定をくつがえすものとして、もう一度考えてほしいと伝えた。

そしてその職員会議で話し合われた結果出されたのは、

- ① 10 月に行われる新しい祭は、18 日（土）は使える日とし、実行委員会で内容を考えた時必要となれば、19 日（日）も使える日とする。準備期間については生徒の実行委員会で考え提案してほしい。

②音楽祭は 12/19 (金) 20日 (土) の2日間とし、22日 (月) を片付けと終業の会にし、代休は取らず冬休みに入る。21日 (日) を使わない理由はその日に学校説明会を行うことと、12月 23日 (火) が天皇誕生日のため終業の会が入れられないため。

と長々と書いてきたが、こうした流れで今、新しい祭「表現祭」が立ち上がったわけだ。これから実行委員会などで話し合い決めなくてはいいことは沢山あるだろうし、大変なこともあるだろうけど、自森生はすごいのだ、教員もすごいのだ。やっぱりこうした方が良かったっていうのは沢山人あるかもしれないけど、今年はこうなったんだからそれからどれだけすごいことができるかを考えたい。そうして来年に繋げればいい。今、実際にいろんな人たちがどれだけ面白いことができるかを考えている。自森にいる人たちがみんな本気で楽しんだら、そりゃもうマジではんばない祭になるんだろうな。

【思い】

これまで行事の話し合いや、いろいろな人と話してきた中で僕が感じたことを書きます。

この一連の流れの中には行事だけの問題ではなく、これからの自森に大きく関わってくる問題が沢山あった。

まず第一に、この話し合いのきっかけは教員が職員会議で決定したことを生徒に伝えるところから始まる。そのことに對し生徒は反応した。生徒は何に對して反応したのだろうか？学園祭をつぶそうとしたことか、教員が勝手に決めたところだろうか、確かに、という納得だろうか。僕はみんなが反応したのは、'教員と生徒の距離'に對してだと思う。教員が考えていることが分からないのだ。生徒数が減り、1つ1つのことで生徒1人1人がやらなければいけないことが増え、教員の負担も増えた。そんな中で毎年同じ行事が行われ、時間だけがなくなっていくた。

教員は保護者に言う。「生徒と議論していきます」保護者はそれを信じて

いる。教員と生徒が話し合った上で決定したことならばそれが一番いいということだ。では本当に教員と生徒は話し合いを十分に出来ているのだろうか？僕たち生徒はいろいろなものごとが決定される職員会議がどういった形で行われているのか知らない。でも教員は僕たちが話し合うことを知っている。個人的な意見を持ちながらそれを職員会議の決定という盾で隠さざるをえない教員。教員の本当に言いたいことを探し、教員に迷惑をかけないようにする生徒。話し合う時間がなく、あまりにも大きな壁が教員と生徒の間に出来ているように感じる。

先日の日程を考える会で初め多くの教員が参加していたのにそれがだんだんと減っていったのは、会に出ると教員自身がどの立場にたてばいいのか分からなくなったからだと思う。そういう意味であの会はぶつかりあえる場にはならなかった。しかし、生徒としては教員と生徒がお互い違う場で話し合うのではなく、同じ場所で意見をぶつけていく場がほしい。また、教員同士がぶつかりあえているのかという不信感も抱く。そして生徒同士も、間違っている意見などないのだから、言いたいことを言わなくてはいけない。生徒も教員もみんなが1人1人違うように頑張っているのだから、否定したり同情する前に、まずお互いが思っていることをぶつけあうことが必要だ。

これから話し合わなければいけないことは山ほどある。それは、いろいろな問題の大もととなっている生徒人数の低下、またその募集の仕方であったり、行事のらんが白紙で出された年間日程表にも、しっかりと日程が載っていた公開研のことでもある。

そうした話し合いの時間が9月にとられ、それとともに1人1人が自分自身とも話し合える時間になったらいいと思う。

最後まで読んでくれてありがとうございました。

神座 想（高3）

委ねること

7月9日(水)の全校集会。これまでずっと議論に関わったりしたりしてきた人たちによって、「行事日程」についての提案がなされた。散会したあとのHRでは、関わった人たちがあちこちのクラスに入り、さらに詰めを行った。春から始まったこの議論も、ようやく終着点が見えてきた。彼らの詰めの仕方、手抜かりのなさに最後までびっくりさせられている。

4月に年間日程表が配られた。その後「行事日程を考える」という会に、何回か出る。そこに集まった人たちによって、新しい認識とか価値観が、じっくりつくり出されていく。そのていねいさと根気強さに、本当に驚かされた。

ある問題があってそれを解決しようとするとき、特効薬みたいなものを求めがちだなと思った。効き目がドラスティックなやつ。教員は特にそういうものを求めがちなのだと思う。あの場のスタートから今回の提案にいたるまで、かなりの時間をかけていた。特効薬でなかったから、このような形になったのだろう。このことを、本当にすごいと思う。

「前期のまとめ」をしっかりする。そのためには、あの時期にはどうしても行事を入れてほしくない。そうした主旨の教員提案だった。「学びのまとめをしっかりする」という“正しい理屈”に対してそれを直接批判したり否定したりすることはむずかしい。結果として、みんなから行事を教員が奪う、という形になった。何かをしたい(しないとしても)のにできないという、大きな制限がかかった。

「学びのリズム」のために9月には行事を入れないという、教員側の主旨は理解できる。だけど、3つを2つに、ということには、まったく納得いかない。

そんなふうな意見が出まくることを想定して、その集まりに出てみた。ちょっと違っていた。

「みんなの意見が聞きたいんだ」という、会を主宰した人たちの言葉。それに伴って出される集まった人たちの意見。上に書いたような意見や従来の形の学園祭には問題が多いとか。そもそも年間日程表は白紙であるべきとか、公開研や学習発表会はどうして入っているんだ？とか、学園祭を見て自由の森に入ってくる子たちがいるとか、さまざまな温度や種類の意見が出ていた。一方、教員から「評価表」の話をされているのに、私たちがまだ話し合っていないというような意見が出た。行事をはずしさえすれば「自己評価表を書くだろう」という教員の読みは甘過ぎで、そういう問題ではないという指摘もあった。行事を入れないという

提案の前に、「自己評価表、最近だめじゃない？」って言ってほしい。それを通り越して、「やらない」という決定が突然降りてきた。

そういう「決定のされ方」についての不信が、大きく横たわっているように思う。

ものが見えなくなるということは、おそろしい。自分の考えやものの決定のされ方の根拠をどこに置くのか。「正しさ」と「大切にしているもの」とのあいだにギャップはないのか。そこにいるたくさんの人の思いや考え、あるいは動きを見たり想像したりすることが、教員にとってだんだんとむずかしくなっているのかもしれない。実はこういうふうな場面に遭遇するのは初めてではない。以前にも教員が決定したことについて、「私たちの頭越しにどうして？」という批判を受けたこともある。だから「自分はまた、何をやっているんだ」という思いを噛みしめている。

「学びのリズム」という切り口ではなく（これを考えることは大切だけれど）、もっと行事の質を高めるための「問い」を持つべきだった。このことは「VOICE」の2号でも書かれていたけれど、「“おいしいところ取り”になっていないだろうか？」ということは、その切り口になる。

美術科の石井さんは、「ねぶたはずるい」と言っていた。学園祭の立ち上がる前に、やることを前提として「ねぶた」が早々に立ち上がっている。「ねぶた」をやりたいのなら、「ねぶた」ができるようにまず学園祭を立ち上げなきゃいけない。「ねぶたはやるけど学園祭の実行委員はムリ」というようなことは、学園祭は、そのことが顕著に現れる行事であるように思うけれど、いろんな行事に横たわっている構造だと思う。

あるから、やる。やりたいこと以外は人まかせ。

自分の役割を人に決めてもらう。気に入らなければ、やらない。

「おいしいところ取り」な構造から離れることで、ようやくいろいろなものが楽しめるんじゃないかなあと思うけれど。

いったいどんな「学園祭」をつくりたいんだろう？ そのことが、回を重ねるごとにどんどん気になっていった。「表現祭」という名称が出てきたり。まったく新しい形の行事の実現のために、手伝えることを探したい。

中野 裕 (数学科)

学びのリズムって何？

半年以上議論が続いた今年度の行事日程について、方向性が決定し、新しい行事作りに向けて動きが始まりました。

この間の議論に 2 回ほど参加して生徒の議論を聞かせてもらいました。生徒のみんながどういう考えを持っているのか知っておくべきだろうと思ったからです。なので、その場で発言することは控えていました。今回 VOICE 編集部から原稿を依頼されたので、今、考えていることを交えながら説明したいと思います。

今回の年間日程に変更を提起した理由は大きく 2 つありました。一つは、前期末の学習のまとめの期間における「学びのリズム」を大事にしたいという点。もう一つは、年間の授業日数（時数）の確保ということでした。僕は個人的にはこれに、全校生徒をまきこんだ丁寧な行事作りをつけ加えて話をしています。

生徒の話し合いでは、やはり 9 月は落ち着いて授業に取り組めないとか、9 月の授業が行事で寸断されるという発言が出されていました。一方では、このような意見がありました。自分は行事があろうとなかろうと評価表にはきちんと取り組んでいる。行事を無くしたからといって評価表への取り組みが充実できるとは思えない。今話し合うべきは行事についてではなくて、評価表に関することなのではないか。

これは、とても重要なテーマだと感じていましたが、僕の参加している回ではその問題を深める方向では議論が進みませんでした。

そこでちょっと気になった事がありました。生徒は「評価表問題」ととらえられていることです。高校 3 年生の一人は授業の課題も含めて考えていましたが、発言の大半は評価表を書くという行為ととらえられていました。確かに「評価表を書く」というだけの問題であれば、あえて行事日程を変更してまでしななければならない問題でもないように思えます。

しかし、教職員会議が考えた「学びのリズム」とは単に評価表をちゃんと書くということだけではないのです。

定期試験で学びの到達を点数化する方式を採らない自由の森では、学び取ったものをレポートや作品という形にすることによって自分のものとしていきます。聞いている分には理解できるのに、いざ自分の言葉で話したり書いたりしてみると言うように言葉にならないということはよくあることです。また、レポートや作品を作成するなかでも、次々と思考が行われていくことでしょう。何度かレポ

ートを経験していくと、当初考えていたものとは伝えたい内容が変化することもある。よくあります。対立する考えを知ること、自分の考えが揺さぶられることもある。

半期の授業の最後のまとめとして生徒が書く「自己評価」とは、そういう学びの過程を経て、どのように自分の見方や考え方が変化したのかを文章にするものです。

授業 — 課題作成（レポートや作品制作） — 自己評価

もちろん、この一連の過程が不十分なままでも、授業の感想は書けるかもしれませんが。しかし、それは自己評価というものではないのです。

高校で学ぶことの大半はおそらく日常生活で使うことはありません。しかし、ちょっとしたものを深く考えてみたり、解決しなければならない課題に直面した場合、その知識や経験、思考が生きてくるのではないかと思います。学んだことは日々のものの見方や考え方に影響を与えるのです。

学んだ知識や技能を「自分のもの」とするために、学びえたものを言葉に置き換え、自分自身の認識（の変化）として再確認した上で、それが自分にとってどのような意味をもつのか、自分との関わりを意識化する過程として自由の森では「自己評価」を重視しているのです。

従来は、その大事な営みの期間に、全校行事を行っていました。その忙しさのなかでも、評価表は忘れずに書いていた人はいるでしょう。しかし、求めているのはそうではない。授業とその課題へのとりくみ、そして自己評価という一連の流れにもっと目を向けたいということなのです。そのためには従来の行事日程では難しいのです。

議論の結果、新しい行事は 10 月に行われることになりました。新しいものを生み出すためには、かなりの時間とエネルギーを注がなくてはならないでしょう。そういうなかでも、議論によって確認された前期末の作業を手放すことなく取り組んでほしいと思います。もちろん教職員も議論を深めて力を注がなくてはいけないと考えています。

これによって 9 月は授業とそのまとめに集中する条件が生まれました。

鬼沢 真之（高校校長）

行事の話し合いに 参加して



教員の想いを受け止める。

他の生徒の様々な意見を聞く。

自分はどんな想いなのか

自分自身に問いかける。

行事の話し合いに参加して、私はこういう感覚を味わうことが大切なんじゃないかと思うようになった。水曜日にあった全校集会とそのあとのHRで、行事についてひとりひとりがそんなふうに身近な問題として意識するキッカケになってくれていたらいいなとわたしは思う。

色んな話を重ねてきて、それを教員に提案して出た今回の結果。色んな問題とぶつかったり、ひとりひとりとらえかたは違うかもしれない。でも「9月の行事をなくす」から始まった生徒の動きにはきっと大きな意味があると思うし、行事の質や評価表の問題を見直すチャンスでもあるような気がする。

わたしは「今年の行事が残り2つ出来る」という結果だけに満足してほしくない。今までの話し合いの過程、行事の質や評価表の問題、教員が最初にしてきた提案の意味を受け止めた上でこれからの行事の在り方を考えていきたい。

味沢 恕子（高1）

～特集 2＊生徒の自発^{じはつ} ① ～

ライブ



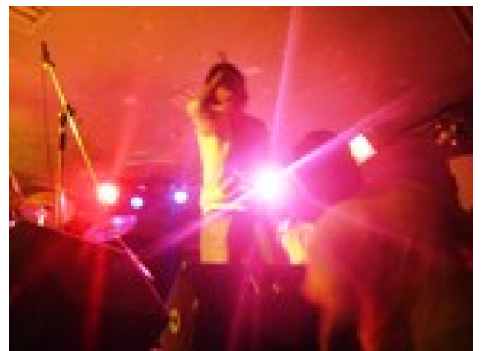
「巻き込む」って言葉が、頭の中に浮かんでくる。「ライブやろう」と言った人のもとに、ぞくぞくと。

ウッドストックも新歓も、毎年のようにあるけれど、こんなに続いているのはなんでなのか、それはみんなが、何かを受け継いでいるからかもしれない。あの音も、音響さんがいなければ聴こえなくて、あの緊張感も本気の姿も、照明さんがいなければ

見えてこなくて。それらここで言い切れない事全てを合わせたものがライブかも…と思うと、

もしも、これから先、ライブがなくなったとしても、それは悪いことじゃないな、と思えます。「ライブをやらない」ということを決めるのはもちろん生徒だろうし、みんなが話し合っ出て出した結論なら、それは自然な流れだろうから。だけど、なくならないだろうな、と、漠然と思います。

ウッドストックとか、名前や時期がだいたい決まっているもの、それは、先の人達が残していった目印のようなもので、会場も人も内容も、その都度ちがう、そういうところが、当たり前だけどすごいことで楽しさの1つであり、大切なことの1つなのかもしれない。



深沢 周（高3）

～ 生徒の^{じはっ}自発 ② ～

有志演劇というなにか

演劇関係者の中では、毎回公演で使っている多目的ホールの事を、タモ、と略して呼んでいる。私はその、ネコにでも付いていそうな軽い呼び方が好きだ。ータモ。うん、軽い。

しかしそんな愛らしい名称とは裏腹に、多目的は恐ろしい場所である。・・魔物が住んでいるらしい。そんな馬鹿な、ていうかなんだよ魔物って、と思われるかもしれないが、私も「住んでるんだよ、魔物が」としか聞かされなかったので、(しかし色んな人に何度も言われた。)詳しくどうとは書けない。(でも金縛りにあったとか変な声を聞いたとかいう話は最近もあった)ー詳しくどうとも書けない曖昧な話だが、私はその魔物の存在を、なんとなく信じている。

この学校に演劇部というものはない。毎回の公演は有志という形で、やりたい人がやりたい人を募ってやっている。タモ、という軽さが好きな様に、私はこの安定していない形が好きだ。やりたい人がやる、というのはつまり、やりたかったら誰でもやれて、やらなくてはいけない、という制約が何も無いという事だし、人を募って、というのは、毎回固定された関係ではない、新しい出会いの中で演劇がやれるという事だ。

演劇は、いかに他の存在の中に自分を開けるか、だと思っている。「圧倒的に自分ではないもの」の世界に触れ、その中に浸ってみた時、そこで自分は何を見るのか。その世界をどの様に聞くのか。そしてそれをその中でどの様に活かすのか。私はそうは思わない、と主張する事ではなく、そう思ってみたらどうなるのか、と歩み寄る事が大事なのだ。世界には、自分が感じられない事、考えられない事、言えない言葉の方が、多い。

だから毎回毎回ちょこちょここと人の入れ替わる有志という形は、とても演劇に向いている。全然違う事をしている色んな人達がいた方が演劇には良い。そしてそれは「部」という形ではなされないだろうと思う。



だからといってももちろん、現状に、何の問題も感じない訳ではない。有志であることで内輪っばさはどうしても出ているだろうし、それによって演劇を敬遠している人達もいるだろう。こもらなければ極められないのに、開かれていなければそこは闊達としない。理想的な姿を形にするのが難しいのは仕方がない事だが、そこへ対する内部の意識が、最近は少し希薄すぎるように感じている。誰もが自分の「役割」を決めすぎていて、そこか

ら頑なに動こうとせず、その為に上手くコミュニケーションが生まれない。演劇は集団での創作なので、コミュニケーションが乏しいというのは致命的である。致命的であるが、その事に気づかなければそれはそれでやっていけるので、そういうものが出来上がる。しかしそれはやはりちょっと残念な事である。みんな少し、自分達の立ち方に、無自覚すぎる。

演劇に、こうでなければならぬ、という正解の型の様な物は無い。しかしだからこそ「どう在るべきか」といつまでも問い続ける事が必要だ。

ー少し理屈っぽい事を書きすぎてしまった。ので、冒頭の魔物の話に戻ろう。何故私は、魔物等とというなにかよく分からないものの存在を信じているのか。ー多目的にならそういうものがいてもおかしくないだろうと思うからだ。

演劇は例えるなら、山登りだ。演劇は、つらい。ひたすらに、つらい。山登りも、つらい。ーでも、それが問題にはならない。何故なら、すぐに忘れてしまえる何かがあるからだ。例えば、この前の公演でいうなら、連日に続くリハーサルの中、誰もがぐたくたになりながら、そこかしこの感動に、色々吹き飛ばされた。初めてスクリーンに映像が映された時の興奮、役者のアドリブの上手さ、ガンガンにかかる美しい音楽、そしてそれらが上手く合わさった時の歓喜。始まればすぐに「ああつらい、なんで私はこんな事をやっているのだ」と思うのに、登っている間はずっと「つらいだけではないけれど、もう山なんて二度と登るものか」と心に誓うのに、一步一步登りつめて、徐々に開けていく視界に疲労を忘れ足取りが軽くなっていく様に、眩暈がする程に演劇というものにときめいてしまう、毎回、こりもせずに。ーそして何度も何度も繰り返し、多目的から離れられない。

なんて事が二十年もされてきている恐ろしい場所なのだ、魔物位いてもおかしくないだろう。いて欲しくないけど。・・・でもいるなら見てみたいので、よく探すのだから見当たらない。これを読んだ人もよかったら今度客席から探してみたい。そして何かを見つけたら教えて欲しい。もっとよかったら魔物を信じたくなるような体験を、一緒にしに来て欲しい。



それでは、最後まで読んでくれてありがとう。

こういう機会をくれたヴォイスの人達ありがとう。あといつも演劇を見に来てくれる人達ありがとう。顧問の大樹もありがとう。

岡野こずえ（高3）

あ、でも次回公演は、多目的ではないどこかの教室借りてやります。七月二十二日・二十三日 場所は未定 有志演劇「100万回生きたねこ」作・演出・出演・内藤えみり、岡野こずえ 多分面白くなるので、是非、お見逃しなく。



公演旅行



まず、なぜこの記事を書こうと思ったか。第一にこの公演旅行というのを知ってもらいたいから。

なぜかという、自分がいろいろなところでいろいろな誤解（たとえば「学校の宣伝のために公演旅行に行くの？」とか）が生じていると感じているからだ。

気持ちよく公演旅行に行くためにもこの記事で少しでも公演旅行のことを分かってくれたら幸いです。

今年公演旅行の日程

7月 24日		飯能から愛媛へ
7月 25日	松山のぞみ幼稚園	愛媛県松山市来住町 1038-1
7月 26日		愛媛から川越へ
7月 27日	川越祭り	埼玉県川越市新富町 2-2-8
7月 28日	ひよこ保育園	長野県中野市東山 1134-1
7月 29日	山の子保育園	長野県松本市里山辺 3728-3
7月 30日	あゆみ保育園	長野県上田市古里 824-8
7月 31日	池田クラフトパーク	長野県北安曇郡池田町会染 7770
8月 1日	インターハイ飯能地区	埼玉県飯能市飯能 226-2
	ひかり幼稚園	埼玉県鴻巣市大字上谷 1950-1
8月 2日	若葉ウォーク	埼玉県鶴ヶ島市富士見 1-2-1

いきなり愛媛に飛んで一公演して、また埼玉に戻ってきかと思ったら、長野に跳んで・・・ハードです。

公演旅行って何？

公演旅行という言葉はたぶん学校に張ってあるポスターやチラシで知っていると思います。では、公演旅行がどういうものなのか。知らない人が多いはず。

公演旅行は郷土芸能部、民族舞踊部、中国舞踊部の有志で立ち上げ、「一緒に公演旅行に行きたい」と集まった人たちが全国を回りながら公演をしていくというものです。公演の構成や司会、裏方まですべて集まったメンバーだけでやりくりしていきます。今さっきまで踊っていた人が同じ公演の太鼓やほかの踊りに出ていたり、裏方で衣装の着付けを手伝っていたり。ついでに公演の記録もメンバーの中でやります。

大人（教員や保護者）とのかかわり

いきなり話しが外れますが、私学文化祭という催しに毎年出ているのですが、ほかの団体（学校）は教員が指示を出して生徒が動く。教員がトップに立って「組織」と言うものが動いていました。公演旅行は生徒が立てた企画なのでもちろんトップは生徒です。

（学校行事と似ているかも）その周りにサブリーダがいて、そのまた下に「係長」がいて組織が成り立っています。大人（教員や保護者）は生徒の力ではできないところ。公演先との連絡や宿泊先の確保

カンパの募集。各地方への宣伝などをやってくれています。

生徒だけで公演旅行という「企画」を作っていくわけではなく、生徒と大人が一緒になって「企画」を作っていくという感じ。個人的に珍しいパターンだと思っています。



最後に

今年の公演旅行は一昨年、去年と連続してきて三回目です。公演先で毎回、「感動しました」という感想が来る。決してものすごく上手いわけではない。けど、上へ上へと「上手くなりたい！！」というエネルギーを感じて感動しているのではないかと思います。一度、見に来るとこの記事で言っていたことが肌で感じられるかもしれません。

板垣 奏男（高2）

「命どう宝」と キューリ

『「命どう宝」平和を唄え・語れ・舞え・遊べ』という催しが6月13日、練馬でありました。沖縄の文化に触れ、憲法や平和について考えよう、という企画でした。植竹しげ子、藤木勇人、大工哲弘、小森陽一らが出演。自由の森学園の生徒も参加。会場には1500人もの人が詰めかけました。植竹しげ子さんが沖縄の踊りを踊り、藤木勇人さんが戦争中の阿嘉島のはなしを舞台上でただ1人1時間にわたって喋り続け（落語みたいな感じ）、大工哲弘さんが沖縄の歌を高らかに歌いあげました。そこらへんはとても文章では表現できません。ぜひいつか、本物を見にいった欲しいです。



その次は、小森陽一さんのトーク。ものごとの意外なつながりにはっとさせられました。参議院で1度否決された「新テロ対策特別措置法案」が、衆議院で再議決されました。それには、1951年の「モーターボート競走法」という前例がありました。「モーターボート競走法」というのはいったい何なのか？ その法律は、競艇（モーターボート競技・それに関する賭け事）を定めた法律です。船舶関係者や、日本船舶振興会にたくさんのおカネを落としました。朝鮮に米軍を輸送する手伝いをしていた船舶関係者に、です。つまりこれは米軍の手伝いをした、ご褒美というわけです。ついでに、日本船舶振興会は今では、日本財団と呼ばれています。自衛隊の事故が起きた時、よく解説している人たちです。

そんな感じで素晴らしい踊り・喋り・歌・講演が続き・・・最後に、「浜遊び」がありました。沖縄ののどかで美しい浜辺を再現するというものでした。そこに自由の森学園の生徒が修学旅行生役で登場。会場の人たちみんなでカチャーシーを踊りました。

平和を想い、何か動く。9条世界会議の参加し、『「命どう宝」平和を唄え・語れ・舞え・遊べ』に参加し、何かやってみようと思い。2008年6月20日、自由の森学園に9条の会をつくりました。『自由の森学園9条の会 9理（キューリ）』といいます。これから憲法のことを考えていこうと考えています。

● 「9理（キューリ）の会」とは？

「9条を理解する会」の略。

日本の憲法のことを深く考えていく会です。学年を飛び越えて、いろんな人と一緒につくっていきたいと思っています。

「キュウリ」といえば、あの青くて細長い野菜のきゅうりを思い浮かべませんか？ 実ができるのだから、もちろん花が咲きます。黄色い花が咲きます。キュウリの花の、花言葉って知っていますか？

「洒落」と「批判」だそうです。ものすごく意味深長です・・・憲法を学ぶことは、洒落てるんだ、オシャレなんだよ、ととるか。それとも、巷で流れている言葉をたすやく信じないで、批判精神を養いなさい、ととるか。とにかく、いろいろ考えさせられます・・・

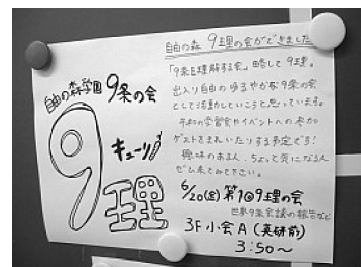
● 9理の会の過程 と これから

2008年

- | | |
|---------|------------------------------|
| 5月4日・5日 | 9条世界会議へ行く |
| 9日 | 9理の会立ち上げ |
| 6月13日 | 「命どう宝」平和を唄え・語れ・舞え・遊べ（前述） |
| 20日 | 第1回・9理の会 |
| 23日 | 沖縄戦終結の日（後述） |
| 7月11日 | 第2回・9理の会 |
| 8月10日 | エコイベント「water green」（越谷にて）に参加 |
| 9月9日 | 第3回・9理の会予定 |

9理の会はそんな感じですんでいます。興味があれば声をかけて欲しいです。

中島大地（高校1年）



濁った世界が、今真実に近づくとき…

— 6.23 沖縄慰霊の日」に—

6月23日…この日がどんな日であるのか…。知ろうとしなければ、近づこうとしなければ…私は一生意識することはなかったのではないかと感じることもある。

その日、東中野で一つのトークライブが開催された。

6.23「沖縄慰霊の日」Live&Talk 長編ドキュメンタリー映画「ひめゆり」を観て語る。

元ひめゆり学徒隊の与那覇百子さん、平和を歌う、広島と沖縄出身の音楽ユニット寿[kotobuki]伊藤剛（GENERATION TMS編集長）宮沢かなえ（絵かき）柴田昌平（映画「ひめゆり」監督）

このトークライブには一つのテーマがあった。「100年後に送りたいもの」同じ道を生きていない人たちが真実を、どう語り継いでいくのか…一方では、歌を歌い…一方では、文字として…一方は映像として。今に伝えているこの人たちは「未来」につなげるための時間を私たちに与えてくれた。



私が「ひめゆり学徒隊」との真実と出逢ったのは、中学三年生のころ。沖縄への修学旅行での「平和学習」のなかであった。今まで避け続けてきた「ひめゆり学徒隊」の真実。見ようとしなければ、誰かが運んでき

てくれるわけではない 知ろうとしなければ、向き合うことにならない事実。この目を背ける行為が、幾人もの人の命を再び傷付けている行為だなんて、気付いていなかった

「私はね…ブランコに乗って泣いていたんです。父親、そして二人の姉が居なくなっ…一人ぼっち。このさきどうすればいいの？ 私はどうすればいいの…」家族が帰らない…、今までの当たり前が、ここにはない。ただ単に時間だけが事実を刻んでいく。取り残されながらも、どうにか生きようとしていた百子さん。この話は、私は、何度聞いても今のすべてが小さく思える。

伊藤剛さんが語った、100年後に送りたいもの。それは「昨日と似た今日」彼の放った言葉は、私の中で陰に潜んでいた言葉が鮮やかな色を持ちこころのなかで溢れだした。

「今、百子さんからのお話を聞いても…この後電車に乗って、次の日会社にいけば「日常」と戻ってしまう。どんなに、平和がいいのかそれを知ったつもりなのに、会社の人とも喧嘩してしまう。」きっと、そう…それが「今」にあることなんだ。全部を知としても、気付けば時間が経過するにあたって色が濁ってしまう。心に知として入った時は澄んだ色だったのに。

百子さんは、私たちのその濁った世界の中を「澄んだ」色へと取り戻してくれた。きっと、全部おんなじこと。闇として深い色に染まったとしても。きっと自分の力でか、人の力でか、本当の「澄んだ」世界へ取り戻すことはできるんだと。

100年後におくりたいもの、私は「時間」を送りたい。今があったという、手にはつかめないけれど、あらわすことならば、できるのだから…。

あなたは、何をおくりたいですか？

及川 瑞貴（高1）

「新・あつい壁」を観ました — 高1 学年ワーク「ハンセン病について学ぶ」 —

6月26日、高校1年生の学年ワークの「ハンセン病について学ぶ」コースの人たちで、東村山に「新・あつい壁」（中山節夫監督／2007年）という映画を観に行きました。

会場では監督の中山節夫さんや全生園自治会長の佐川修さんもお話をしてくださいました。

映画は若いフリーのルポライターが、ホームレスのおじさん取材しているところから始まります。おじさんの「昔、殺人事件のあった日に、その事件にまぎれて盗みをした。自分の犯した罪まで、その犯人が背負って死刑になったのかと思うと・・・」という話をきき、彼は、「出世するのにいい記事になる」と思い、その「事件」について調べ始めます。「とても難しい問題で、大変だ」と恋人のお母さんに忠告されつつも、処刑された犯人がいたハンセン病療養所に行って取材をします。そのうちにハンセン病患者に対するずさんな裁判や、古くからあった差別などを知り、だんだん意識がかわってゆきます。怒りを覚えた彼は、ルポを書き上げます。しかし恋人のお母さんの様子がおかしい。実は彼女はハンセン病患者の娘で、当時患者だった母親にひどいことを言ってしまっ、それがトラウマになっていたということを告白します。



この映画の題材になっている「藤本事件」は、1952年、熊本県菊池郡で起こった殺人事件で、容疑者藤本松夫がハンセン病患者であったために 偏見と差別が影響し、捜査、裁判、上告、死刑執行の過程で公正さを欠いた。冤罪事件であるといわれている。（「日本らい史」山本 俊一 著）

事件当時熊本県はらい患者の発見と収容を督励していて、役場の男性が藤本松夫に入所勧告をし、それでその男性を恨んでいたというのが動機とされています。

まず、役場の男性の家にダイナマイトが投げ込まれ、その犯人にされて菊池恵楓園（ハンセン病療養所）内の留置所に入れられました。その後脱走し、脱走している最中にその男性が殺されます。弁護士が事件当日のアリバイを証明したにもかかわらず、

「らい予防法」の隔離政策の中、十分な審理を受けることができませんでした。

裁判も、熊本地方裁判所の出張裁判という形で、療養所の中で行われ、ごく限られた人しか入れませんでした。裁判官や警察官はみなハンセン病に感染することを恐れ、白衣に手袋をはめ

て、資料をめくるときさえ竹の箸を使っていたそうです。基本的人権として保障されている、証人に対する反対尋問もさせなかった。そして死刑判決が出されます。藤本自身も無実を叫び続け、救援運動も始まり、最高裁にも上告しましたが、破棄され、1962年に突然、処刑されてしまいました。

弁護士は調書の間違いを正すために、いろんな人に話を聞き、事実を訴えますが、個の力は弱く、「あつい壁」を破れません。ハンセン病患者であることを理由に、法の前の平等が得られなかったのです。証人たちを脅し、無理やり藤本松夫を犯人に仕立て上げる場面も出てきます。これでは、裁判とは言えないのではないかなと思います。

この事件が起きたのは50年も前ですが、今現在、私たちは、同じような法の枠組みの中で生きています。

最近新聞に載っていた記事で、2008年北京オリンピック期間中の中国への出入国などに関する指針に「ハンセン病患者の入国禁止」が含まれていることがわかりました。

「何が変わったのか、何が変わらないのか」中山節夫監督はそこを描いたと言っています。

国の都合で正義？が通らない。

そもそも、病気がうつることを心配してではなく、明治時代、日本政府が放置していたハンセン病患者を、日本に入ってきたヨーロッパ人の目にふれることを国辱として、隔離政策を始めた日本。これでは自分の国を栄えさせるために隔離したようなものです。というかそうなのです。

太平洋戦争のとき、国は国民に「鬼畜米英」と教え込み、恐怖をあおった。人は恐怖に駆られるととんでもないことを信じてしまいます。国民より強い立場にある国がそんなことをしたらどうなるのか・・・

今の世の中はあるていど言論の自由があるけど、昔はそうじゃなかった。

渦中にあったら自分でよしあしの判断が出来るか、

巻き込まれないで考えられるか？ そんなことを考えてしまいます。

見る機会が少ない映画だけでもっといろんな人に知ってほしい。

でも元患者さんの中には、知ってほしい人、もうそっとしておいてほしい人、両方がいます。平均年齢は80歳。まだ考えることはたくさんあります・・・

高橋 文子（高1）

日本の農業は危機的な状況にある

—高1保健講座に参加して—

7月1日、やまけんが自由の森学園に来て、保健の授業をしてくれました。高校1年生に向けての授業でしたが、保護者もたくさん来ていました。

「やまけん」とは、山本謙治さんのこと。自由の森学園の食堂のキャベツが美味しくて農業に興味をもった、という面白い人です。『やまけんの食い倒れ日記』というブログを書いていることで有名です。でも単なるグルメではありません。最近では、『日本の「食」は安すぎる』という本を出版し、日本の食・農業を見直そう、と訴えています。

やまけんは、授業の中でたくさんのことを語ってくれました。まず、前提としてあるのは「はっきり言って、日本の農業（および畜産）は危機的な状況にある」ということ。日本の食料自給率（カロリーベース）は40%。穀物自給率（米・小麦・そば）にいたっては、28%です。食糧というのは人間にとってとても大切なもの。それがなければ生きていけません。なのに食糧の多くを外からの輸入に頼るということは、危険です。外の色んな影響をもろに受けるし、もしかしたら外からコントロールされる恐れもあるからです。

では、どうして食糧自給率がそこまで下がってしまったか。その原因は、消費者にある、というのがやまけんの言っていることです。消費者は、新鮮で、安全で、美味しくて、それでいて安い食べ物を求めます。でもいいものをつくろうとしたら、それなりに値段は高くなって当然です。なのに、消費者は頑として高いものを買わない。そうすると、安い輸入品が跋扈する結果となります。そして日本の食糧はうその値段（適正価格より遥かに低い値段）になってしまいました。まじめにいいものをつくっても売れない。大損をしてしまう。そういった状況が、食べ物の偽装問題を生みしました。

また、儲けがでないどころか貧乏になるので、若者は農業に携わろうとしなくなります。その結果、国内の農業を支えているのは、60代以上の人ばかり、というおかしな状況が生まれました。60代以上の方はあと10年ほどで農業をやめるでしょう。そうしたら、日本の食糧自給率が0%になってしまう日が来るかも知れません。今はその瀬戸際だ、とやまけんは言います。

国内で食糧をつくれないなら、海外から輸入すれば良いじゃん、という人が昔たくさんいました。今でもけっこういると思います。だけど、現在、世界の人口は急激に増加しています。いずれ食糧不足の時代がやって来る、というのは農業関係者の一致した見解です。そのとき食糧の値段はどんどん釣りあがっていく。いくらなんでも、恐ろしく高い値段の食料を毎年買い続けることなど無理です。とすると、食糧不足が巻き起こり、飢餓が日本で発生することになります。そうはならず、食べ物を手に入れたとしても、それと引き換えに外からコントロールを受けるようなことになるかも知れない。日本は国としてやっていけなくなります。

そうなる前に、やはり、食糧自給率をあげる必要があります。国産の食べ物を買って、国内の農家の人たちにお金をまわす。そうしたら、農家の人たちが日本の中でそのお金を使うから、結局日本の経済が潤う、自分のもとにお金が戻ってくることになります。結局、それが、安全で美味しい食べ物を手に入れるための最善のみちなのです。

それで、できるならば将来みんなに第一次産業に関連する職について欲しいかな、とやまけんは言っていました。農業の現場は、ほとんどワーキングプアに近い状況、とすら言える訳ですが。事実を知り、買う側・自分たちの意識を変えていけば、それも改善できるはずです。

国産の高いものを買うという決断は、大変なことかもしれないけど、現にそういったことを実行している人たちが日本にはいます。無理といって、みんなが踏み出すのを躊躇したら、結局何も変えることができません。ありきたりな言葉だけど、踏み出す1歩が大切なのだと思います。安全で、新鮮でおいしい食べ物を食べることの出来る1番の近道、それははっきりと見えています。

中島 大地（高1）

◎

Colum by editors

→ 以下、5篇。『ヴォイス』編集メンバーによる、自由な
コラムを集めてみました。それぞれの味をお楽しみください。

ぼくの好きな「解き方」

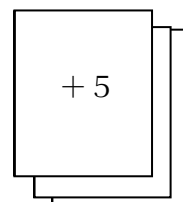
この自森に入ってきて自分なりに考えた数学の計算方法を教えちゃいますっ！
簡単に覚えちゃうプラス・マイナスのかけ算
プラス・マイナスのかけ算を、カードを使って説明するね

たとえばこの問題

$(+5) \times (+3) =$ 文章にするとこんな感じ

「+5」のカード3枚もらった

→
もらう



とうぜん「+5」のカードをもらうと得点が増える わーい！

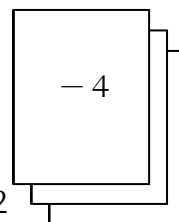
$(+5) \times (+3) = (+15)$ 答え +15

今度はマイナスをもらおうと

$(-4) \times (+3) =$

「-4」のカード3枚もらった

→
もらう

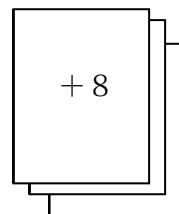


「-4」のカードをもらうと得点が減る がっかり……

$(-4) \times (+3) = (-12)$ 答え -12

つぎはとられちゃうと……

$(+8) \times (-3) =$



「+8」のカードを3枚とられたよ ← とられた
「+8」のカードをとられると得点がプラスからマイナスに……
がっかり……

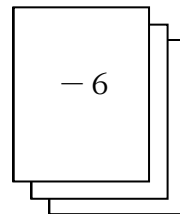
$$(+8) \times (-3) = (-24) \quad \text{答え} \quad -24$$

最後だよ

$$(-6) \times (-3) =$$

「-6」のカードを3枚とられたよ ← とられた
「-6」のカードをとられると得点がマイナスだったのに、こ
んどはプラスになった わーい！

$$(-6) \times (-3) = (+18) \quad \text{答え} \quad +18$$



プラス・マイナスのきまり

$$(+)\times(+)=(+)$$

$$(-)\times(+)=(-)$$

$$(+)\times(-)=(-)$$

$$(-)\times(-)=(+)$$

◎ 自森の数学の授業

なぜプラス・マイナスのかけ算を選んだかというと……

いままで図と文章で表すところなのに簡単にわかるなんて…って思って。

普通の数学は、図とかなくてただの式しかなくてよくわかんない… 中一の頃はまったくわかんなかった…… だけど…自森の数学は違った。

自森の授業はわかりやすく覚えやすかった、しかも…図があるだけでこんなに変わると思ってなかった！

押立 敏樹（中3）

えっ!?!まじかよ。

5/18日に Bullet For My Valentine のライブ行ってきました。

前座は Protest the Hero バカテクで感動しました。笑 前座が終って 30分程でステージに白い幕が掛けられて。結構前のほうにいて、4列目くらいに居て、尋常じゃなく暑く、まさに、すし詰め状態 ^^ ; Scream Aim Fire から始まって超盛り上がり 1stアルバムの中の曲連発。

その後何曲か演った後、マット (Vo/G)が観客の方に向って「歌えるか」的な事を言っていて、周りの人が「うぉー!」とかアピールしているのに便乗して自分もアピールした。そうしたらマットと目が合って、指さされて、その後手招きされて、周りの観客が「上げろ上げろっ!」って皆で持ち上げてくれてステージの真下まで頭の上を持ち上げて運ばれて行った。ステージ上がって、もうこの時点でわけわかんなくなっていて、軽いパニック状態 笑 あともう 1人白人の人もいたかな。マットと握手して、マットが下手のほうにあるマイクを指さして「歌っちゃえ」的な事を英語で言っていて、自分はマイクの前行った。

曲は 【Hand Of Blood】 1曲歌いきった。歌えてたのかわからないけど 笑 いや、むしろ歌えてなかった感じ 笑



まさか Zepp のステージに上って歌うとは夢にも思わなかった。憧れの人と共演(?)しちゃったよ!って興奮してました。^歌ってる時にマットとパッジ (Gt)がギター弾きながら横にきてテンション上がった。パッジとマッドもそんな感じだったかな。2人とも笑顔最高で 優しかった。PVとか写真とかじゃ絶対見れない顔だった。人間性? かなんなのかわかんないけど、音楽とか、目に見えないもの

(?)を通して何かがめっちゃ伝わってきた。感動して泣きそうだった。

1曲終わり、マットとパッジと握手して、ハグして胸板厚っ!とか思ったり マットが顔近づけてきて耳元でダイブしろって英語で言ってきて、「まかせろ!」って思ってグッハッってやって、助走つけてダイブ!!

真面目に怖かった。あれは。4~5メートルぶっ飛びました。笑 周りの人に「やったね!」とか「最高だったよ^^」とか言われ騒ぎながら LIVE続行。次の曲は 【Room 409】 これで 1回締め、メンバーが舞台そでに下がる。もちろんアンコールが湧き上がって、Hearts Burst Into Fire Spit You Out Waking The Derron 終わっちゃったーと思ったらもう 1回アンコール

おっ Metallica 欸。笑【Creeping Death】演奏してました。まさかのメタリカ。不意打ちされました。でも嬉しかった^若い人よりおじさん世代が盛り上がった、年代的に。

ライブ終わった後はもうクタクタで汗びっしょり。500円もした三ツ矢サイダーを一气飲み。喉が壊れてた。叫びすぎ&歌いすぎで 笑

家に帰る途中に 絶対 BEW の曲全部弾けるようになると思った。って前回の SUM41 の LIVE見た時もそんな事言ってた気がする ^^でも今回は真面目に。

一生に1度あるかないかのとても貴重な体験が出来ました。めっちゃ幸せです。



佐々木 優太 (高1)

飯田橋ギンレイ



この前、2本立てで映画が見れる映画館行ってきました！（私は“2本立て”とか“3本立て”っていう響（言葉）に以前から憧れてて、そういう映画館にずっと行ってみたかったんです。）そこは、飯田橋にある「飯田橋ギンレイ」っていう映画館で、わりとマイナーな映画や問題作を上映してます。（学生は1200円で見れるから、かなりお得！）私がその時見たのは、「やわらかい手」（サム・ガルバスキ監督）と「いつか眠につく前に」（ラホス・コルタイ監督）の2本です。どちらもなかなかおもしろくて、見応えのある映画でした。映画について色々書きたいことはあるけど、でも今回は「飯田橋ギンレイ」の事と、そこに見に来る人達について書きたいと思います。

「飯田橋ギンレイ」は小さい映画館でした。スクリーンは1つしかなく、通路も狭いし座席は指定じゃありません。私が行ったのは、午前の9:50分からの回でした。10分前に入場が始まり席に座ったら、周りの人達がみんなごそごそと朝ごはんを食べ始めました。ランチパックをむしゃむしゃ食べてるおじさんとか、家で作ってきたジャムパンを食べてるおばさんとか。最近の映画館ってその劇場で買った物しか持ち込んじゃダメだから、その光景にちょっとびっくりしました。もう1つびっくりした事があって、2本目の上映から入ってくる人達もいて、そういう人達は席が空いてないから、座布団を借りて通路に座ってみてるんです。座り見ありな事にちょっと驚きました。なんていうか、庶民的でなごやかな雰囲気です。私は「飯田橋ギンレイ」は映画を見せる、見てもらうって事を大切にしてるんだなって感じました。映画もよかったし、雰囲気もおもしろかったし、念願の2本立て体験はなかなか楽しかったです。

小金沢 基(高2)

「趣味、ゴミ拾い」

シュシュシャコシュシュシャコ、歩いて8分の道を自転車で走る。車や人をよけて走る。ダッダッダッダ、同じ道を小走りで行く。空の色とか木たちをみながらいく。トコ、トコ、トン、トコ、ゆっくり歩く。アリ

りを踏まないように気をつけて歩く。トコ、んぐ、ハシ、ガサ、すごいゆっくり時間をかけて少しずつ進む。落ちてるゴミがみえてきた。

落ちてるゴミを拾いながら進む。ビニール袋を持ってる時はそれに入れてく。ない時は手に持つけど、そんな時ビニール袋が落ちてるとほのかに嬉しい。今までどれだけのゴミを無視してきたんだろう…と思ったが、見てみぬフリをしてたんじゃなくて、ゴミが道に落ちてるのが当たり前になってたんだ。「なんでゴミが落ちてたらいけないの？」と聞かれると上手く答えられない。でも、子どもが沢山遊ぶ都営住宅の前にタバコの吸いがらが落ちてるといやだし、こぼれた炭酸ジュースのペットボトルの口んところにアリが沢山集まっているのをみると、何か違う感じがする。

ボランティアじゃない。ゴミ拾いは最高の自己満足だ。何よりも、拾ったらそのモノはもうそこにはない、ってのが最高だ。自分で拾ったモノがみて分かる。それと同時に自分以外にも



人がいることに気づく。知らない人とながった気分になる。その人たちがど持ちでやってるのかは分からないけど、ゴミは、拾いたい人が、拾いたい時にいと思う。なんかほんとになんとも言しみがあるのだ。

と違った速さで進んでみたら、そんな違った楽しみを見つけました。

神座 想（高3）

ケムクサ

20歳になるまで、タバコは吸わせない。

「おはよう」というひとことも、未成年者への喫煙防止活動です。

未成年の喫煙は、大人 1人ひとりが自覚し、社会全体で取り組む問題です。
未成年の喫煙は法律で禁止されています。



「おはよう」というひとことも、
未成年者への喫煙防止活動です。

未成年者の喫煙は、大人一人ひとりが自覚し、社会全体で取り組む問題です。

JTの活動

私たちJTも全国各地で「未成年者喫煙防止法」の啓発や「啓発キャンペーン」の実施など、数多くに貢献した活動に取り組んでいます。

未成年者の喫煙は法律で禁じられています。

20歳になるまで
たばこは
吸わせない。

NO!
UNDER
20

早朝だろうか、家の前で箒を手に持ち微笑む女性、その女性の目線の先には、制服姿の少年が、同じく微笑みながら立っている。

このような、言葉と写真が、ある新聞の一角に。これを見た未成年者たちは、大人たちに何を思うのかな。

未成年の喫煙を止めるものの1つとして、最近「タスポ」が実施されました。それでももちろん未成年者の喫煙は減るだろうけど、数字に見えないものを、ちゃんと見ていてくれるだろうか。うまくは言えないけど、「見えづらい所」を、あまり見ていないように感じてしまう時があります。

未成年にも、大人にも、いろいろな事情があるだろうし、なにも見ていない、考えないなんてことは絶対にはないだろうけど。

「タスポ」には違和感を感じてしまいます。 深沢 周（高3）

このページは図書館企画の宣伝

- ・ 学びの森

- ・ 公開研

どうして「ヴォイス」を発行するのか

このごろ、自由の森学園が、たくさんの「観客」と、一部の「舞台に立つ人」に二分されている気がします。これはあまり、いいことではないと思います。いろんな人の声が表に出てこない、自由の森学園全体がだんだんと同じ色に染まっていってしまって、「多様性」や、「個性」といったものが見えなくなってしまう。

そこで、批評紙・意見紙として『ヴォイス』を作ることになりました。

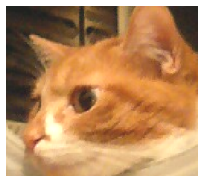
まず、ある物事をとらえるとき、生徒の視点を大切にします。大人の理屈や視点も、もちろんあるかと思いますが、まずは自分達自身のベースに戻って考えていこう、というわけです。どんなに立派な事を書こうと、まだ半人前、できないこともあります。でももしかしたら、まったく新しい視点が、ポツと生まれてくるかも知れません。そういったことを意識していけたらいいな、と思います。

それともう一つ、自由の森学園はあとの人たちに受け継ぐことがあまり上手ではない、と私たちは感じています。1回1回、いいものが出来ても、そこで終わってしまう、途切れてしまっています。しっかりと積み重ねて、つなげることで見えてくるものがあるはずなのに、それではもったいない。

『ヴォイス』とは言葉どおり、声のことです。鋭い指摘を取り上げ、小さなつぶやきも拾い上げ、その「器」として、声の発信源となっていきたいなあ、と思います。

編集 一同

Special thanks to all the Guests



Cham Cat

ヴォイス編集部

〒357-8550 埼玉県飯能市小岩井 613 自由の森学園図書館 出版相談室（大江）

Fax 042-972-6661 e-mail jb0@jyunomori.ac.jp

編集；押立敏樹（中3）佐々木優太・中島大地（高1）板垣奏男 小金沢 基（高2）

神座 想・深沢 周（高3） （表紙；佐々木優太）